

直さるる心

「一。前々住上人、法敬に對して仰せられ候。『播きたてというもの知りたるか』と。法敬、御返事に『播きたてと申すは一度種を播きて手をささぬものに候ふ』と申され候。仰せに曰く『それぞ、播きたて悪きなり、人に直されまじきと思うところなり。心中をば申し出して人に直され候はでは、心得の直ることあるべからず、播きたてにては信をとることあるべからず』と仰せられ候云々。」

一。何としても人に直され候ふように心中を持つべし。我が心中をば同行の中へ打出しておくべし。下としたる人のいう事をば用ひずして必ず腹立するなり。浅ましき事なり。たゞ人に直さるゝように心中を持つべき義に候。(御一代聞書)

一度種を播いて手を入れないが如く、人に直されまいと思う心は悪い心だと誠められたのである。

「何としても人に直され候ふように心中を持つべし。」この御教訓は、いやしくも道を求めようとする者の必ず心がけねばならぬことである。もしこの聖訓にして生きないならば、

「播きたてにては信をとることあるべからず。」

宗教の生命たる信心さえ成就しないであろうとのみ言葉である。

「たゞ人に直さるゝように心中を持つべき義に候。」

素直な心になれと言われるのである。直されるままに直したからとて、信心だとは言えないであろう。しかし誰の言うことも耳に入れず、直されまいと力むところには邪見我慢が動いている。邪見我慢をつつぱる所には信心は生れない。信心は如来聖人の教えに信順する純なる心である。

だが、この蓮如上人の教えは、人間の大方が持つ私どもの痛いところをつかれたものである。言うべくして、行うことは至難なことである。行為の一部分について、論された場合はまだ聞きやすい。しかし、その死活の大問題、信心の問題について言われた場合に逆捻さかねじに來たり、言った人の欠点について、腹を立て、來なくなったり、ついには遠く逃げてしまったりする。

七十歳、八十歳になつて、宝玉のような念仏の人がある。こうした人は、必ず若き日に、やかましく言つて叱り教へてくれた人を持った人である。

直さることなくして老いたものは大概は愚痴の人となる。相当な年になつては、なかなか直るものではない。又直そうと教えてくれる人もない。

ある人の申さるるよう、

「私は、家庭中での伊蘭樹いらんじゆ(悪臭ある毒の木、煩惱にたとへる)じゃ。しかし皆様によつてたかつて、お育て下さるので有難い。かく言われる人からは、ほのかに浄土の梅檀樹せんだんじゆの香が動いている。

「あなたのことを人々は臭いと言いました。」

「何臭いですか。」

「伊蘭樹の悪臭」

「そうですか。その臭いと言われる人は、どんな香いがするのでしょうか。」
とある人は責めかけて来る。ますます悪臭のひどいことよ。

ほめてくれる人はいない人。欠点を言う人ならその正体をつかれていても悪人。欲は必ずこう動く。長年この心を打ちのめされることなく、み法を聞けば聞くだけ、頭が高くなり、心が硬直して、ついに救うべからざるものになる。これほどおそろしいことがあるのか。

頭を下げたら値打ちが下るように思い、大恥でもかいたように思う。しかし、いかなる聖会でも平素でも、頭を下げて侮辱された人は一人もいない。

久遠劫来の謗法も、一度の廻心懺悔によつて救われる。

多くの場合、一代人に厄介をかけるような存在が、一番頭を下げず、直されることを嫌う。

私の中にこれがある。恐れねばならない。私を直して下さい。忠告して下さい。叱つて下さい。しかしなまやさしい奴ではない。腹を立てるかも知れませんが、かまわずに遠慮なく言つて下さい。